近代高山の料亭建築と大工・施工業者について

―料亭洲さきを事例として―

はじめに　料亭洲さき（以下、洲さき）の位置する高山市街地は明治から昭和初期までの町家が多く残り、各時代の変化をうかがうことができる。市内には国指定重要文化財の日下部家住宅や吉島家住宅、松本家住宅をはじめ、伝統的町家が多く残る。加えて、街道筋に展開した旧城下町の町人地は伝統的な町並を良く留め、これまで高山市三町と下二之町大新町の２地区が重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。これら伝統的な町家に加え、近代の発展をものがたる洋風意匠の近代和風建築や近代建築も残り、重層的な歴史空間を形成している。

洲さきの敷地は高山市三町重要伝統的建造物群保存地区内の最南端に位置する。伝統的な表構を残す主屋は、平成21年（2009）に高山市有形文化財に指定されている(図33)。洲さきの建物群の建築的価値や意匠的特質をさらに追求し、今後の保存・活用に向けての基礎資料の作成を目的として、2019年度に高山市が奈文研に委託して調査を実施した。本論考は調査成果の一部を報告する。

洲さきの既往調査と現況　洲さきの建物群は町並保存対策調査や高山市史編纂に際しての調査、岐阜県近代和風建築総合調査において調査されている[1)]。敷地には北正面に主屋と調理場棟が建ち、主屋背面には客席である客間棟、敷地背面には土蔵群が建つ（図34)。主屋は江戸時代の表構を良く留め、客席である客間棟は床構えなど、数寄屋建築の特徴をよく表す近代和風建築である。洲さきは現役で営業をおこなっており、「宗和流本膳」という高山の伝統的な本膳料理を提供している。

図33　洲さき主屋外観

洲さき建物群の建築年代　本調査では、洲さきの建物群は以下の建築年代であることがあきらかとなった。まず主屋は、棟札にある寛政６年（1794）の建築で、明治初期には屋根を切り上げるなど大規模な改築がおこなわれ、昭和初期頃には江戸時代の表構を留めつつ、現在の形式に改められた。客間棟は大正末から昭和初期の建築で、後述の洲岬家所蔵文書からもあきらかである。敷地背面の土蔵群は東のオオキイクラが大正２年（1913）に現在地に移築され、その他２棟の土蔵は昭和初期の客間棟建設時と同時期の建築と考えられる。つまり、洲さきの建物群は大正末から昭和初期に画期を迎え、現在もその形式を良く留めていることがあきらかとなった。

設計者と大工　高山の宮大工であった八野忠次郎によれば、大正末から昭和初期の改築では、設計監督は大文酒造店の当主の小森春雄であるという[2)]。詳細は不明ながらも、小森春雄は建築の専門家ではなく、高山の博学多識の文化人であったといい、建設に際して京都へ視察に赴いた記録が残る。大工および関連の施工業者に関しては、洲岬家所蔵の「昭和四年九月裏二階離座敷造作並ニ物置キ土蔵 應接 屋根換 庭垣 諸事記」（以下、「昭和四年諸事記」）に詳しく記される。大工は笠原喜助、喜代三（本名は喜代蔵）[3)]、与三吉が頻繁に記される。高山の大工で笠原といえば、江戸時代の御用大工筆頭であり、芳国舎渋草製陶所（明治12年〔1879〕、高山市指定有形民俗文化財）を手掛け、幕末から明治初頭にかけて活躍した笠原甚七があげられる。笠原喜助らは、笠原甚七の兄である笠原喜七の子孫にあたる（図35)。高山町役場（現市政記念館、明治28年〔1895〕）など、高山の近代建築を数多く手がけた坂下甚吉（８代）は笠原甚七の弟子である。

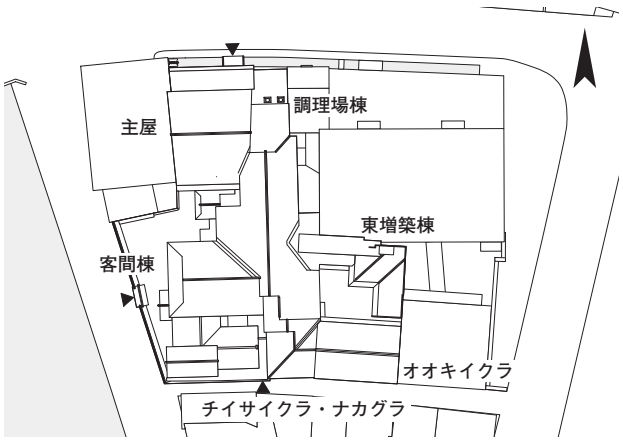

図34　洲さき配置図　1：1000

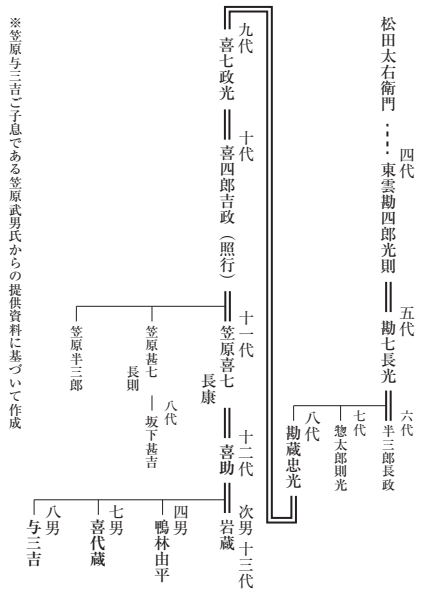

図35　笠原家系図

表５　「昭和四年諸事記」記載の施工業者および関連業者

「昭和四年諸事記」記載名	職業	氏名・会社名	昭和初期頃の所在地	出典
笠原喜助・喜代三・与三吉	大工・指物	笠原喜助・喜代蔵・与三吉	高山町片原町	－
荒木	建具	荒木三造か	高山町二之町	①
白政	家具・指物	白川商店・白川正之助	高山町魚屋町	②
二村佐二郎	左官	二村佐次郎	不明	③
飛騨窯業	瓦・左官	飛騨窯業株式会社	高山町二之新町	①②
白川	瓦屋	白川寅蔵か	高山町本町	①
水口材木店	銘木・小白木	水口庄蔵か	名古屋市中区伊勢山町	④
柳瀬	材木・小白木	柳瀬製材所・柳瀬彦之助	高山町三之町	①
天野	材木・小白木	天野荘蔵	高山町一之町	①
物産	製材・材木	飛騨物産株式会社	高山町七日町	①②
木工会社	材木・床板・椅子等	飛騨木工株式会社	高山町名畑小路	①②
和仁竹ノ助	畳	和仁竹ノ助	高山町一之町	①
高忠	石工	高原忠次郎	高山町吹屋町	①
国島	板金	国島賢次	高山町八軒町	①
安川上木	金物	上木金物店	高山町安川町	①②
山崎	セメント・鉄材等	山崎本店・山崎與一郎	高山町三之町	③
北長	セメント・金物	北長商店・北村長之助	高山町一之町	①②
野村	ガラス	野村文蔵	高山町二之町	①
電燈会社	電燈	飛騨電燈株式会社	高山町朝日町	②

表５註
・出典番号は以下の通り。①須田圭三『大正懐昔飛騨高山 庶民生活資料雑綴』1983、②東京交通社『大日本職業別明細図』1929、③高山左官業組合編集発行『高山左官業組合創立三十年の歩み』1998。④名古屋商工会議所編『名古屋商工案内』1928。
・出典①は須田が『飛騨之高山商工名鑑』や『飛騨史壇』掲載広告、出典③などをもとに、大正時代の氏名と職業、所在地を復元したものである。

「昭和四年諸事記」には大工への祝儀の記録があり、笠原与三吉が最も多く受け取っていた。おそらく昭和初期の改築では笠原与三吉が筆頭の大工であったと考えられる。笠原与三吉をはじめ、笠原家は高山市片原町の在住で、高山市三町の町家に出入りしていた大工であるという。「昭和四年諸事記」では笠原は建具も多く手がけた記述が残っており、指物大工としても名をあげていたと伝わる。

関連する施工業者・資材業者　「昭和四年諸事記」には大工のほかにも、関連する施工業者や材料等を扱う建築資材業者の名前も多く記されていた。工事内容や仕入れ材料、記載名から、特定可能な人物についてまとめたものが表５である。主として高山で活動する地元業者が関与しており、床の間の銘木などは名古屋の銘木業者から仕入れていたことが判明した。表５にあげただけでも、建物の建設に関わる業種はおおよそ網羅できる。

昭和初期の洲さきの建物群と高山の建設業界　「昭和四年諸事記」記載の建築費は２万５千円に及び、昭和初期の経済不況のなかでも盛況ぶりがうかがえる。洲さきの建物群は、日下部家住宅や吉島家住宅のような、近世大工の明治期における作風とは一線を画した近代和風建築であり、華奢で繊細な軸部の構成や、床構えに銘木を用いつつも派手さを最小限とした意匠など、正統的な数寄屋建築の意匠といえる。その中でも華美な派手さを嫌う意匠は、高山特有の文化・作風であり、洲さきの建物群は、数寄屋建築と高山の文化の融合といえる。特に大工では、笠原与三吉らは指物大工としても活躍し、繊細な意匠をもつ数寄屋建築にも適応可能な技術力を有していたと考えられる。設計指導に携わった小森春雄は建築の専門家ではないが、それを補い、また建築として完成させる能力を笠原は有していたといえる。

料亭洲さきの建物群は、京都など都市部の近代和風建築に匹敵する意匠性を有し、大工らの技術力も高かったことがわかった。くわえて、建築的な特徴だけでなく、昭和初期頃の一連の改築に関わった大工や関連施工業者、建築資材業者についても、史料からあきらかにすることができ、高山における昭和初期の建設業界の一端を解明することができた。　**（福嶋啓人）**

謝辞
本論考にあたり、洲岬孝雄氏ならびに笠原武男氏には資料をご提供いただいた。ここに感謝申し上げます。

註
1）既往調査報告として、奈文研『高山－町並調査報告－』1975、奈文研『高山Ⅱ　伝統的建造物群保存対策調査』高山市教育員会、1984、高山市教育委員会『高山市史　建造物編（上）』2014、麓和善・鳴海祥博・窪寺茂・舘龍午『岐阜県近代和風建築総合調査報告書』岐阜県教育委員会、2016が挙げられる。
2）八野忠次郎「高山町役場と洲岬家の建築について」高山市所蔵文書、1985。
3）笠原与三吉のご子息である笠原武男氏への聞き取りによる。